

京都秋期特別集会

向処如何——ヨハネ13・36～14・24

1959年11月8日(京都)

小池辰雄

聖書は大ドラマである 何処にゆき給うか わが受くべきバプテスマ 道・真理・生命 降参・平伏 ゼロ＝無限大 十字架という道 絶信の信 実存的否定 十字架が切り開いた絶対空間 根源現象 実力の裏付け キリストの腕に腕枕 キリストという原始核 在りて在らしむる者 向処如何 孤児にしないよ

【ヨハネ13・36～14・24】

36 シモン・ペテロ言う『主よ、何処にゆき給うか』イエス答え給う『わが往く処に、なんじは今に従うこと能わず。されど後に従わん』37 ペテロ言う『主よ、いま従うこと能わぬは何故ぞ、我は汝のために生命を棄てん』38 イエス答え給う『なんじ我がために生命を棄つるか、誠にまことに汝に告ぐ、なんじ三度われを否むまでは、鶏鳴かざるべし』

1 『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。2 わが父の家には住処おとし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われは汝等のために処を備えに往く。3 もし往きて汝らの為に処を備えば、復きたりて汝らを我がもとに迎えん、わが居るところに汝らも居らん為なり。4 汝らは我が往くところに至る道を知る』5 トマス言う『主よ、何処にゆき給うかを知らず、争でその道を知らんや』6 イエス彼に言い給う『われは道なり、真理なり、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。7 汝等もし我を知りたらば我が父をも知りしならん。今より汝ら之を知る、既に之を見たり』8 ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給え、然らば足れり』9 イエス言い給う『ピリポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。10 我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等という言は己によりて語るにあらず、父われに在して御業をおこない給うなり。11 わが言うことを信ぜよ、我は父におり、父は我に居給うなり。もし信ぜずば、我が業によりて信ぜよ。12 誠にまことに汝らに告ぐ、我を信ずる者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。13 汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為さん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。14 何



事にても我が名によりて我に願わば、我これを成すべし。¹⁵ 汝等もし我を愛せば、我が誠命^{いましめ}を守らん。¹⁶ われ父に請わん、父は他に助主^{たすけぬし}をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。¹⁷ これは真理の御霊^{みたま}なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。¹⁸ 我なんじらを遣^{みなしめ}して孤児^{みなしめ}とはせず、汝らに来る^{きた}なり。¹⁹ 暫くせば世は復^{また}われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。²⁰ その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん。²¹ わが誠命^{いましめ}を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛し、之に己を顕^{あらわ}すべし。²² イスカリオテならぬユダ言う『主よ、何故おのれを我らに顕して、世には顕し給わぬか』²³ イエス答えて言い給う『人もし我を愛せば、わが言を守らん、わが父これを愛し、かつ我等その許に來りて住処^{すみか}を之とともに為^せん。²⁴ 我を愛せぬ者は、わが言を守らず。汝らが聞くとこの言は、わが言にあらず、我を遣し給いし父の言なり。

●聖書は大ドラマである

クリスチャンはたくさんいます。けれども、キエルケゴールが

「天才よりもクリスチャンの方が少ない」

と言いました。本当の意味におけるクリスチャンというものが、さあ、神さまの目から見たら、どれくらいいますか。まことに少ないかもしれません。要するに、神・キリストの目から本当にキリストの者であるという、パウロが言ったような意味におけるキリスト者ということになりましたならば、ゆるぎないわけですが。どうか、皆さんは、いい加減なクリスチャンではなくて本ものになっていただきたいと思うのです。いや実にもう既に本ものでいらつしやるかもしれません。今日は初めてなので、私は思いつくままに、皆さんにお話したいと思う。

聖書は、どのような角度から皆さんはこれを学んでいらつしやるか。よく「聖書研究会」というようなことを聞きますが。聖書は、いくら研究なさつても結構ですが、研究の角度からはこの聖書が語っている世界には、その奥には入れないということは確かです。私に言わせますと、これは神さまの「オラトリウム」「聖劇」です。ドラマである。教えではない。現実なる神の大史劇である。歴史的なドラマである。この歴史的なドラマは、過去・現在・未来にわたるところの大ドラマの中に——聖書というのは単に書かれた過去のことではない。過去の事実でもあるし、また現在の事実でもあり、また将来、来るべき事実でもある——そういった過去・現在・未来というものを永遠という角度から掌握している。そうい



うような驚くべき神のドラマでありますので、これはちょうど映画を見ているように傍観しているのではダメなんです。その場面の活劇中の人物にならなければ。我々一人びとりがこの劇中の人物になって、活人物となるのでなければ、この聖書は読めない。

そういう読み方を、日蓮の言葉をかりまして、私は「身読^{しんどく}」と言う。身体^{からだ}でもって読む。日蓮が佐渡に流される少し前に、日照に

「法華経を頭で読む人はたくさんある。心で読む人は少ない。しかし、これを身体

で読む人にいたっては極めて少ないが、お前はこれを身体で読め。身読せよ」

と諭^{さと}したということです。そういうわけで、日蓮は法華経を身読いたしましたから、法華経の文字は決して彼においては観念ではない。日蓮は、もちろん非常によく研究もしました。けれども、彼においては法華経の文字は化体^{かたい}している。身体に化している。であるから、彼が「南無妙法蓮華経」と言えば、それは空念仏ではない。私たちクリスチャンが「主よ！」と呼び奉るときに、空念仏の呼び方をしたのではしょうがない。仏教の世界は悟りの世界ですが、この福音の世界はもつとハッキリとした具体的な世界である。

そういった現実の中に入っていく。信仰とは、何か思い込みではなくして、最も現^{うつ}なことなんです。一番現実なこと、現実中の現実です。ここに私たちはお互いにこうやって相まみえています。これもひとつの現実です。しかしながら、この目で見ている現実よりももっと深い現実が、この聖書が開示しているところの現実なんです。だから、聖書の啓示というものは、露^{あらわ}になりながら、実は隠されているという、非常にある意味においてはむずかしい。しかしながら、それに気がつきますと、こんな素晴らしい楽な世界はまた他にないというようなわけであります。

●何処にゆき給うか

今日は、「向処如何^{むくところいかん}」という題を掲げました。向処如何という。これは禅宗の方に「去処如何^{ここからいかに}」という言葉がある。去るところ如何という。私はそれを、むしろ向処如何という言葉な勝手な言葉をつくりました。そこで、聖書を自由に開きながら、その世界に一緒に入っていかうと思う。私はお説教はいたしません。皆さんと一緒にその現実の中に共に入っていくだけです。

ヨハネ伝13章36節のところに、

36 シモン・ペテロ言う『主よ、何処にゆき給うか』

とある。有名な言葉です。「クオバデス・ドミニ」^{クオバデス・ドミニ}という。この「何処にゆき給うか」を私は「向処如何^{むくところいかん}」と言ったわけです。向かわれるところは何処ぞやと。

イエス答へ給う『わが往^ゆく処^{ところ}に、なんじは今従^{したが}うこと能^{あた}わず。されど後に従^{したが}わん』

「今はダメだよ。一緒に連れて行ってやりたいけれども、行けない。しかし、のち



には従うだろう」

と、なぞのようなことをキリストは言われた。

そしたら、ペテロというのは非常に直情径行でありまして、

37 ペテロ言う『主よ、いま従うこと能わぬは何故ぞ、我は汝のために生命を棄てん』

と。このペテロという人は非常に気合のある男だから、大いに主のためには何をも棄ててという意気込みをもっている。人間的な決意や決断は、なかなかあるときはいい。けれども、ペテロは躓いたり転んだり。この場合もそうですが。

ペテロという人は、弟子たちと一緒に舟に乗ってガリラヤ湖上にいましたが、夜明けがたにキリストが波の上を涉つてこられた。海はそうとう荒れてます。化け物が来たかと思つて、皆は驚き怪しんだところが、キリストが、

「我なり、懼るな！」

と。「心安かれ」ということです。自分の先生の声を聞いたものですから、ペテロは非常に喜んでしまつて、

「あなたでしたか。それではひとつ、あなたのところに行かしてください」

と、実に前後も考えないで、彼はそう言つて、舟から出ていって、水の上を渡って行つた。驚くべきことです。自分の経験も判断も理性もみな超越してしまつて、主の言葉に、主にぶつかったものですから、もう何もかもうれしくてしょうがなくて、

「あなたのところへ行きたい」

と言う。

「来たれ！」

と。それで、彼はキリストの力に引きつけられるようにして進んで行きました。ところが、風が吹いてきた。

「ペテロは風を見て恐れたれば、沈みかかった」

とある。非常にいいかと思うと、ガタンと分裂して沈みかかる。こういった波みたいな人物がペテロです。この場合も、大いに決意したところはいいけれども、それはもうキリストには見えている。「それはまことに健気な決意だけれどもダメだね」と。よく、お話をして、決心をさせる牧師さんがありますね、「決心カード」とかいふものを出して。私は今晩、「決心カード」なんか持つてませんし、あなた方に決心してもらおうとは思っていません。

●わが受くべきバプテスマ

37 ペテロ言う『主よ、いま従うこと能わぬは何故ぞ、我は汝のために生命を棄てん』 38 イエス答え給う『なんじ我がために生命を棄つるか、誠にまことに汝に告ぐ、なんじ二度われを否むまでは、鶏鳴かざるべし』



その通りであつたことは、皆さん、福音書でご承知のとおりです。ペテロは庭の外に出て泣いたと書いてある。キリストは、今大事な最後の場にきまして、

「これから行くんだ」

と言う。父のもとにキリストは行かれる。父のもとに行かれる前に、キリストはどうしても通らなければならないところがある。これはルカ伝12章にも書いてあるとおり、

「わが受くべきバプテスマあり」

と言う。火を投ぜんために来たが、その受くべきバプテスマ、火のようなバプテスマがある。これは十字架であります。十字架という血のバプテスマのごときところを通つて、それからキリストは天界に行かれるわけです。

もちろん、キリストはいきなり天界へ行つてさしつかえない方であるんです。それは、キリストは行きたくてしょうがない。イエスはエノクやエリヤよりもつと素晴らしいです。それはもう、行こうと思えば、直ぐ行ける。けれども、これは行けない。

「私は行きたいんですけれども、どうか、あなたのお意の^{こころ}ようにしてください」

と。それがゲッセマネの祈りであります。そして、とうとう、キリストは、この旧約聖書のイザヤ書53章を本当に身に体して、そして、我々の罪のために、それを負う^{こひつじ}羔羊となり、その打たれ碎かれることによって我々に平安を与え、不義を赦すという、神さまの——神さまでなければできない、またこの業^{わざ}をしなければ人類はどうにもならないという——のつぴきならない大業をなさしめられた。そういう意味の十字架に掛からしめられたわけです。十字架は、宗教的天才が殉教の死をとげたのではない。キリストの十字架は絶対に他に類^{たぐひ}のない意味と事実である。

ヨハネ伝の14章で、

1 『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。2 わが父の家には

住^{すみ}処^かおとし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われは汝等のために^{ところ}処

を備えに往く。3 もし往きて汝らの為に処を備えば、復きたりて汝らを我が

もとに迎えん、わが居るところに汝らも居らん為なり。

と。キリストは向処如何、何処に行くかという、十字架を通つて天界へ行かれます。もちろん、復活を通つて、復活して天界に行かれますが、行きつばなしではない。キリストは、

「また、来るよ」

と言われる。ドイツ語で「さよなら」と言うときに、「アウフビーダーゼーン」「また会うまで」と言う。日本人は「さらば」と言つて諦めてしまふ。そこはドイツ人はいいですね、「またお会いするまで」という挨拶です。キリストも、

「また、お前たちに会うよ。またやつてくるよ」

と。キリストは天界に行きますが、また地界におりていらつしやる。さあ、それはどういうことか、というわけであります。



●道・真理・生命

4 汝らは我が往くところに至る道を知る』⁵トマス言う『主よ、何処にゆき給うかを知らず、争でその道^{いか}を知らんや』⁶イエス彼に言い給う『われは道なり、真理^{まこと}なり、生命^{いのち}なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。

もちろん、キリストは、また使徒たちも、神の国はやがて到来するという終末的な迫りをみな感じておられた。終末的な迫り、神の国の到来ということ。

「御国を来たらせたまえ」

という祈りは実に迫った祈りであつた。ですから、

「その御国へ入れてやろう」

ということはもちろん、この場合の直接の意味であります。けれども、

「私はまた来る」

というのはまたもうひとつ別な意味をもっていた。そこに大事なわけがあるんです。

「われは道なり、真理^{まこと}なり、生命^{いのち}なり」

と。これはみんな定冠詞が付いています。

「私こそはそのただ一つの道であり、そのただ一つの真理であり、そのただ一つの生命である」

と。「富士山の山頂に行くには御殿場口も吉田口もいろいろあるが、山頂に行くのは同じだ」というような、宗教の世界でもそういう考えかたをする人もあります。けれども、この福音の世界は、もうひとつ言いますと、いわゆる宗教ではない。福音は福音である。

キリストが「父」と呼んで深く交わっていらつしやる神。それは、しかしながら、何か髣乎のはえたお爺さんではない。これは「霊」でありまして、

「霊であるから拝する者も霊と誠とをもってする」

という。しかも、それは「父」である。父神であり、また霊神である。これは切つても切ることのできない概念である。「概念」と言つても、頭^{こころ}の概念という意味ではありません。「父」と言つて親しく呼びかけ、しかもその父は全く「霊」なる方である。これは非常に大事なことです。「キリスト教の神観」なんてことは私は言いたくはないけれども。

「その霊なる父への自分は道である」

という。なぜ、「自分は道である」かというならば、もし宗教的天才で、「これを模範とせよ」というなら、これはただ「道」なんて仰るわけではない。この「道」というのは、

「どうしても私を通らなければ行けないんだ」

ということ。その通らなければいけない道には一体何があるか。さきほど申し上げた十字架がある。この道は十字架の道である。彼はこの十字架道そのものである。始めから終りまでキリストは十字架を背負っています。また、

「我はそのただ一つの真理である」



という。「真理」というと、私たちはすぐ観念的な気持でこれをとらえたがるが、聖書において「真理」という言葉は極めて具体的なもので、真実の真実相であります。概念的に限定されうるようなものは、把握されうるようなものは、この具体的な人間を動かす力をもたない。私たちこの具体的な存在を本当に動かす力をもつ真理そのものは実に具体的な——もし言うなら、真理体と言ったつていい——真理を体して体現している、真理の化身であるという意味です。私たちの言う言葉の「真理」というものを言うならばね。それが聖書における「真理」という。

「本ものだ」

ということです。そのことはもう少したつと、もうひとつハッキリします。また、

「私は生命である」

という。生命はたくさんあります。けれども、私たちの生命はみな滅び行く生命です。今、大地震がくれば、私たちはこの部屋から外へ出ようとする。私たちの自然的な生命を自ら守ろうとする。無意識的にですよ。無意識的に、私たちの根源の深層の意識というものは、生命を求めている意識です。私たち生命体というものは根源的に生命を求めている。

皆さんは今、無意識に何をしているか。呼吸しているでしょ。無意識に呼吸していると、いうことは即ち、生命をして生命せしめているところの現象である。肉体は寝ていても、呼吸は止まらない。私たちの心臓は、どんな時計も止まりますが、我々の心臓の鼓動は止まらない。止まった時は、地上の生涯が終りというわけです。とにかく、オギャーと言ってから、いわゆる永眠というところまでは、絶対にこの心臓の鼓動は、他のどんな精密な時計もこれにはかなわん。それくらい生命というものは生命いのちしている。けれども、それは残念ながら、滅びていく。

私はよく、青年に言います。

「君たち、死んでも死なない生命があると言え、者は手をあげてごらん」

と言うと、誰も手をあげない。いろんな理屈を言つて、なかなか大学生なんていうのは偉そうなことを言いますけれども、「死んでも死なないような生命があるか」と聞けば、誰も手があがらん。それは実は、一番大事な問題をおろそかにしている。それだけは別にとつておいて、その他のことを一生懸命で問うている。けれども、その我々の滅びいく生命が脅かされれば、これは一番の重大問題として考える。それに対処する。ところが、その滅びいく生命の中に、本当に滅びないような生命を、死んでも死にませんというような、そういういたた事態に到らないから、無意識的にも、何かにぶつかればそれが不安となったり、疑いとなったり、恐れとなったり、いろいろなことに出てくるわけです。

ところが、キリストは、

「私は生命である」

と言われる。キリストが「生命である」と言われるときは、もちろん「永遠の生命」のこ



とです。ヨハネ伝でも、

「私はお前たちに永遠の生命を与えに來たのだ」

という。道であり、真理であり、生命である。

「父への唯一の道であり、これこそは本ものであるというものであり、これこそは滅びないというものである」

という驚くべき発言です。

●降参・平伏

⁷ 汝等もし我を知りたらば我が父をも知りしならん。今より汝ら之を知る、既に之を見たり』

聖書で、「知る」という言葉は決して頭で知るのではない。この「知る」という字は、人格的に靈的に知ることなんです。預言者ホセアあたりから、特にこの「知る」という言葉が非常に深く出ております。「私はあの人を知っている」という、この「知っている」というのは、ただ名前で知っているのではなくて、本当にその全存在を知る。神さまが、

「神知りたもう」

というこの「知る」というのは、その全存在を人格的に全体的に把握していることが「知る」なんです。決して単に知的に知って、概念的に分析的に知っていることではない。だから、ヨハネ伝でもよく、キリストは

「われ父を知り、父われを知る」

というような言い方をしている。パウロも、

「今知るところはおぼろだけれども、かの時にはわれ知られたるごとく知らん」

なんて言っている。そうすると、

⁸ ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給え、然らば足れり』⁹ イエス言い給う『ピ

リポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。

私を本当に知っていないのかねと。

我を見し者は父を見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。

私たちはいくら神さまを瞑想したって、どうにもなりませんよ。むしろ仏教的な悟りの世界へ来た方がいいです、へんてこな瞑想をするよりも。ところが、この霊であり父であるところの神さまは、ついにナザレのイエスにおいて自らを顕したもうという、この言葉は神の子でなければ氣違いの言葉であります。普通の人間には言えない。

「私を見たものは父なる神を見たものである」

なんて、これはイエスが絶対に独特な自信があるから、仰った。しかしながら、今、私は「自信」と言ったけれども、私たちが考えるような、そんな自信ではない。

福音の世界は極めて具体的だとさつき申し上げました。神さまはどういう方であるかと



いうことは、特にこのマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの福音書において、全イエス・キリストにおいてハッキリそれが現されている。キリストは、

「この私にぶつかって、この私を通らなければ、神のところに行けない。何となれば、私が今、父を顕している。私の他に本当に父を顕しているものはないんだから」

と。こういうわけです。だから、福音書の世界はいわゆる宗教ではない。福音は絶対に啓示であります。蹟きの啓示であります。

「ナザレのイエス、大工の子において神が顕れた、そんな馬鹿げたことがあるか」と、理性はそう言う。しかしながら、聖書の世界は、分かる分らないではない。この事実の前に、この福音書のキリストにぶつかって降参しなければ、本当にその前に平伏さなければ、全存在をもってその前に平伏すまでは、この聖書の世界には入れないんです、外から見ているうちは。キリストに真正面から「お面!」とやられて、

「参りました!」

と言つて初めて入れる世界なんです、この聖書の世界というのは。だから、普通の人がこの福音の世界になかなか入れない。せいぜい、頭では、「なるほど、キリストというのは素晴らしい人だ。神の人だ」というくらいのところだ。大いに感心したり、またそれを神学的にいろいろ整理したりしてあるだけの話ですよ。整理したり、感心したりすることではない。本当に驚嘆驚倒し、そこに倒れてキリストに降参するまでは、そこを通らなければ入れない世界なんです。だから、

「我を見し者は父を見しなり」

という、この驚天動地の言葉の前に本当に平伏すかどうか。

しかしながら、それはなかなか平伏せないんです。どういうわけかという、さきほど讃美歌にもありましたように、人間に、その人に「罪」の問題が本当に問題になるまでは。

●ゼロ＝無限大

ところで、キリストという人は、

「私を見た者は父を見た」

と言われたけれども、一体そんなに彼自身が本当に素晴らしいんだろうか。彼は、

「私は実は、何もできない」

と言つておられる。ヨハネ伝5章30節に、

「³⁰我みずから何事をもなし能^{あた}わず、ただ聞くままに審^{さば}くなり。わが審きは正し、それは我が意^{こころ}を求めずして、我を遣し給^{みこころ}いし者の御意^{みこころ}を求むるに因^よる。」(ヨハネ5・30)

とある。その他、方々にあります。キリストは、

「自分は何もできない。何も言えない。何も教えられない。私の教えは私の教



えではない」

と言われた。だから、無教であり、また無行であり、無言である。キリストという人は、
「実は、自分は何でもない」

と言われる。私はこの言葉にぶつかりまして、私の信仰にひとつの転機がきたんです。神の子キリストだから、何か自明的に素晴らしいかとみんな思ってしまうわけです。ところが、キリスト自身は「自分は何でもない」と言われる。そこで、私はよくこういう等式を書く。

「 $0 \parallel \infty$ 」(ゼロ $\parallel$ 無限大)

と書く。イエスという人は自分をゼロにしていた。これは本当にそうです。イエスという「1」は即ち「0」であつた。そうすれば即ち、「 ∞ 」(無限大)となる。何となれば、彼は自分をゼロにしていたら、神という100%的なものが、無限大的なものが彼の中に入ってきた。

このことは実は、山上の垂訓の最初の一句をつかまえて、私はハタと来たんです。

「幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり」

と。普通、キリストの「山上の垂訓」と言うから、教訓だと思つて^{おしえ}いる。それは教えでもありましょう。けれども、実はキリストは告白をしておられる。どの註解書を見たって、そう書いてない。私はむしろ、「山上の大告白」と言いたい。あの言葉の奥にキリスト自身の告白が入っていた。

あの「心」というのは「プニューマ」「魂」という字です。イエスというひとは魂が本当に——今言つたように、「何もできませんよ」とキリストは言つておられる——魂が貧しく、貧しき極みです。無一物です。あれは無一物という字で、ルターが「ベッテルアルム」なんて書いてますが、乞食のように何もないということです。魂が無一物で、何も自分ではない、言えない。

ある青年が、「善き先生」と呼んだら、キリストは、

「なぜ、私のことを善いと言うか。神さまの他に善いものはない」

と言われた。彼の魂は本当に貧しい。何もない。そうしたら、神という天国が彼の中に入ってきた。即ち、

「幸いなるかな、霊の貧しき者——魂のゼロなる者、霊の零なる者よ——天国
即ち神、天国の本体、即ち神がキリストの中に入ってきた」

と。なるほど、この言葉の中にはキリスト自身の告白が隠されていたことに気がついたとき、私は本当に畳の上に平伏した。そのときに、私の全身が本当に熱くなり、何か全身の血が涙となり、火となった。それで、あの一句をつかまえたならば、この山上の垂訓が全部楽に読めてしまった。

●十字架という道

「幸いなるかな、魂の貧しき者。天国はその人のものなり」



と仰ってくださいが、さあ、私はできるかという、できない。キリストのまねをしよう
たつて、それは無理な話です。それでは、どうしたらいいか。私はキリストの中に飛び込
みます。そのキリストの中に飛び込むだけでも、一体、飛び込めるかというわけです。
そこにキリストが、

「幸いなるかな、汝、わが十字架によりて霊の貧しくされたる者よ。復活の我

——天国体——が汝の中にあり」

と、その次に響いてきた。こう響いてきたから、私はたまらなかった。即ち、私はキリス
トの中に入ろうとするときに、この

「我は道なり」

という一つの道があった。その道は何かというと、十字架という道であった。この十字架
という道、キリスト自らが十字架という道になっていらつしやるから、その道の中に入っ
て行つた。そうしたら、このキリストの中に入れたんです。キリストの中に飛び込むた
一関は十字架なんです。即ち、十字架によつて実は私というものはもう碎かれてしまつて
いる。

「私はまだ傲慢でありまして、私はまだこうでありまして」と、クリスチャンがみんなそ
う言う。「もう少し聖書を勉強してから、もう少し人を愛してから、もう少し祈つてから」と、
みんなそうやつて謙遜のように言う。それは人間的謙遜かもしれない。けれども、キリストは、
「わが十字架を視よ。お前がそうやつていろいろ問題にしたり、苦しんだりしてい
ることはみんなもう解決済みだよ。既に贖われてあるぞ」
と。

「汝は贖われてある」

ということは、キリストが無言の十字架——パウロが「十字架の言」と言つたのはそのこ
とです——十字架というこの事態が、二千年前の十字架は今もなお現実に十字架でありま
す。霊の十字架として迫っている。これが即ち、私たちに迫る無言の言です。言葉ならざ
るこの十字架という事実が語る言葉です。だから、「キリスト教」ではないと私は言うんです。
教えではない。キリストはすべて事実をもつて我々に迫ってくる。

この十字架という事実で私はすつ飛ばされてしまつてゐる。パウロが、

「われキリストと偕に十字架につけられたり」

と言つたのはそのことです。即ち、

「汝の過去も現在も未来も、もう既に問題は根源的に片付いているぞ。もし、『ま

だ私はこうです』と言うなら、私のこの十字架の贖いを薄めるのか」

と。キリストの十字架に対して、いかなる私たちの魂の事態がその贖いを薄めることがで
きるか。それは十字架を空しくするものであつて、謙遜のごとくして実は謙遜ではない。
謙遜とは、神の前に、キリストの十字架の前に本当に平伏してしまうこと。さきほど言つ



た「降参する」とはこのことなんです、このキリストという現実、十字架のキリストというこの現実。パウロがコリント書簡で、

「汝らには、もはや十字架につけられ給いしままなるキリストの他は、何をも語るまじと思う」

とまでパウロは言った。

このような十字架のキリストが私の中に絶対空間をつくった。絶対無の空間をつくりました、その無の中に——それは至聖所です——そこに来てくださるのが復活のキリストです。復活のキリストは御霊をもつて来たりたもう。復活して天上に往かれた、天界の神の右にいたもうところのキリストは、御霊をもつて私たちの中に宿ってください。

「やがて、来るよ」

と言われたこの「来るよ」とは、そのような意味において、「向処如何」というのは、天界に行つて——「ああ、キリストは天に行つてしまつて、どうにもならん」ではなかった——実はもつとも深く、ペテロやヤコブやヨハネがキリストと一緒にご飯を食べたり道を歩いていたりした、そういった現実よりもつと深い現実に入る。

「お前たちの中に入る。私はお前たちの中にやつてくる」

と。向処如何とは、天界へ行つたキリストは、今度は地界に私たちの中に宿らんとして、天界に往かれた。それは十字架を通つて天界に往かれたから、その十字架が即ち私たちの中に入らんとするところの、その一つの大事な道なんです。この十字架を通つたから、キリストは私たちを完全に、砕かれざる私たちを砕いてしまった。その砕かれたる我にハタと気がつくことです。

●絶信の信

「自分なんか当てにするな、自分の信仰すら当てにするな」

ということ。信仰は量的に量つてはいかん。絶対に質的なものです。信とは絶信の信です。

「法然にすかされても、地獄に往つても、どうでもよろしい。私は法然さんの言う

ことを絶対に受けとります」

というのが、親鸞の信であった。無義の義ということ。あの歎異抄の信仰の角度は非常にこの福音的な角度です。ひよつとすると、親鸞は景教としてのキリスト教を知っていたのではないかと思われるくらいです。

己の信仰に絶するこの絶信の信が、パウロが言うところの信であり、キリストが言われるところの信仰である。「信」の字は「人偏に言」と書くでしょうが。

「はじめ太初に言あり。言は神ともと偕にあり。言は神なりき。」(ヨハネ1:1)

と。「言」とは神のロゴス・クリストス。超在していたところの、アブラハムより先にあつ



たところのこのキリストは神と偕にあつた。それは神の表現としてあつた。それが具体的に今度は、地界に表現してきた。それが「言」ですよ。だから、私はあの「言」というのは「れいげん霊言」と書いたら、明治初年の聖書の翻訳に、

「太初に霊言れいげんする」

と訳してあつたので、やっぱり明治の始めの人は偉かったなと思って、私はうれしかった。この「れいげん霊言」は、あるいは古い訳では「道」とも訳してあります。

その言なるキリストが受肉した。ヨハネ伝1章14節は大事なところですよ。

「言なるキリストは我らのあいだに幕屋を張った」

と書いてある。そして、

「これは神の独子の栄光で、めぐみ恩恵とまこと真理とに満ち満ちている」

と書いてある。言が受肉する。即ち、言なるキリストを、人なる我が受けとるということが、「人偏に言」で、これが「信」ということ。信仰の信の字は即ち、キリストを、神の言を、神の言たるキリストを受けとること。また、聖書はそのキリストの言ですから。その言行は全部、言でもあり、全部、行であると言ってもいい。そういったキリストの現象、証しとしてのこの言における、

「わが言は霊なり、生命なり」

という、これが私たちの中に化体かたいすることを信というんです。私は、「人偏に言」というこの「信」の字を、聖書の角度からそうつかまえたのであります。

●実存的否定

そのようなわけで、イエス・キリストの「十字架・復活・聖霊」という事態が実は、この山上の垂訓の第一言の中に、

「幸いなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

という一句の中に隠されていた。

このヨハネ伝14章10節に、

10 我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等という言は已によりて語るにあらず、父われに在いまして御業みわざをおこない給うなり。

この「在す」という字は、「中に宿る」という字です。

「父が私の中に宿って御業を行い給うのである。自分が言っているのではない」

と。父が——というのは、キリストにとつてはもちろんこれは神の霊です——中に来て御業を行い給うという。

11 わが言うことを信ぜよ、我は父にあり、父は我に居給うなり。もし信ぜずば、我が業によりて信ぜよ」

「わが言うことを信ぜよ」というのは誤訳で、「我を信ぜよ」ということ。



「我に信頼せよ、我に一切全托せよ」ということです。

「一切任せなさい。私はお父さんなる神さまに一切任せて、全托して、そして動いているんだ」

と。それをもう少し内側から言えば、神の御意みこころによって動いている。だから、私は「聖意靈法」なんていうことを言う。聖なる神さまの意志、神の霊の法則。聖意靈法においてキリストはそれを、聖意靈法を体現しているんです。

「御意の天に成るごとく、地にも成らせたまえ」

という主の祈りがある。そうすると、普通は傍観して祈っている。「御意が天に成るごとく地にも成つてくだされば大変結構です」と。それはダメですよ、そんな祈りは。

「御意の天に成るごとく地においても、この我を通して、成らせたまえ」

という、この「我を通して」がなかったならば、あの祈りは祈りにならない。もちろん、他の場合においても成つてくださいということもあるでしょう。けれども、その祈りの中心は、この「我を通して」なんです。キリストが

「汝の御意を成させたまえ」

と言うときには、

「自分の意ではありません」

と言って、汝に対して「然りしか」と言うときには、我に対して「否いな」と言うんです、ハッキリ。「私も大抵そうですが」なんて、そんなのは信仰にならない。父に対して「然り」と言うときには、我に対して「否」と言う。我に対して「否」と言うことは、自分を本当に棄てているということです。全托している。無私ということ。無私、私無きということ。キリストは、

「己を愛する者はわが弟子となることができない。己が生命をも憎まなければ、

わが弟子となれない」

と言う。みなこれは否定です。概念的否定ではない。実存的否定です。意志的な否定であります。だから、アブラハムがエホバに、

「主よ、然り」

と言ったときに、

「アブラハム、エホバを信す。エホバ、これを彼の義となしたまえり」

という。アブラハムがエホバに対して「アーメン。然り」と言ったらば、アブラハムは自分に対して「否」といった。自分の判断、常識に対しては「否」と言う。そうしたら、神さまは、

「そうだ、それが本当だ」

と言って、これを義となしたもうたと。



だから、「義」という言葉は、「信仰によつて義とされる」というこの「義」というのは、決して正義の義ではない。

「神の御意を立てて、自分の意を立てない」

という、この一本、垂直の角度です。この関係が成り立つところを「義」というんです。キリストは神の御意を立てて歩いてきた。だから、「義人」というんです。何か倫理的に義しい人だとか、そんなことではない。

●十字架が切り開いた絶対空間

そういう重厚なことであります。キリストは神さまをすっかりそうやって立てているから、神の御意が楽に入ってくる。無私ですから。必然のように。これは必然法則になつてくるんですから。魂の世界の必然法則になつてくる。だから、非常に自由なんです。ちょうど、物理の法則の世界では、風が吹けば木の葉は揺れるでしょ。「私は揺れない」なんていう木の葉はありません。風が吹けば、ちゃんとその強さに応じて揺れます。物理法則が実に素晴らしく動いているのを、これを

「ああ、天然はいいな。天然は自然だ」

と言う。「天然は自然だ」というのは実は、物理法則が素晴らしく動いている世界です。

ところが、人間界は——神さまの意志が自由に動いていけば、人間世界は何と自然で、もう天国ですわ。お互いの間に本当の和と歓喜があつて、お互いの間に信頼と愛が通じて、世の中は何の心配は要りはない——お互いに我を張っている。そして、神の御意でない。みんなこの「我が意」が動いている。それだから、人間界は混沌としています。これが即ち、「罪」というやつです。罪とは何ぞやというと、神の御意を、聖意靈法を立てていないということが「罪」です。それができないということが罪。

「義人なし、一人だになし」

とはそのことなんです。天的法則が、天則が成らない。西郷南洲だって、

「己を愛するは悪の第一なり」

なんて言った。彼はやつぱり、魂は大きいですよ。天を相手にしている。

そのようなことで、何でもなし。神さまの法則に乗つかること。ちょうど、燕が風の法則に乗つかつて自由に動くでしょ。どんな素晴らしい飛行機ができたつて、燕のあの翻りにはかなわない。なんと、燕は自由に動くのだらう。ああいうところを見ても、私たちも燕のような動きかたができたらなと思う。

私はこの福音書にでつくわすと、キリストという人はなんと自然な人だなと、自然よりも自然な人だと思う。もう完全に律法を乗り越えている。律法を乗り越えて、律法の根本精神を本当に動かししている。「律法は聖なるものにして」とパウロが言ったその神の聖法に動いていた。イエス・キリストという人は聖法に動いていた。



残念ながら、我々にはそれができない。だから、このキリストの十字架によって自分がすつ飛ばされた。私は相変わらず死に到るまでダメですよ、こんな小池なんていうやつは。だけれども、私の中に、その十字架が切り開いたところの絶対空間に、この御霊が入ってきた。「私はお前の中に来る」

と。「向処如何」と言ったら、キリストは天界に往って、また再び今度は私のそばではなくて、中に入ってしまった。これが旧約から新約への驚くべき展開なんです。旧約の世界は、

「エホバわれと共にいます」

と、詩篇23篇にも書いてある。「わがうちに」とは旧約の世界では書けないんです。もちろん、預言者には、

「エホバの御霊わが上に臨み」

とは書いてあるけれども。手離しの世界ではなくて、本当に罪が贖われた世界において、キリストは私たちの中に入ってしまった。

「お前たちと本当に一つになりたいんだが、今はできない」

と。それは、ある時は、弟子たちに按手をして、そして霊を伝えて、素晴らしい業をさせたことはありますよ。けれども、それは一時的現象です。本当に内住しませんですよ、聖霊が。聖霊が内住するという世界は絶対に十字架を離れたらダメです。十字架なしの、手離しの「聖霊、聖霊」なんて、聖霊派なんてやったら、とんでもないことになる。

それで、「十字架と復活と聖霊」の事態は、私にとっては三相一貫で絶対に切ることができない。十字架と言え、その背後に復活と聖霊あり。聖霊と言え、その背後に復活と十字架あり。復活と言え、その後にもまた十字架と聖霊あり。この三つは切ることができないんです、私にとつては。円関係です。生命の真理というものは決して分析・総合ではない。一如一環の世界です。

●根源現象

16 われ父に請わん、父は他^{たすけぬし}に助主をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。17 これは真理の御霊^{みたま}なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。

そういうわけで、キリストは私たちの中に、

「お前たちに助主を与える。これをお父さんをお願いして、この真理の助主を与えて永遠に汝らと共におらしむべし」

と。そして、汝らの中に来て、

「彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり」

と。「パラ」(共に)と「エン」(中)と両方書いてあります。助主がお前たちに来て——そ



うして一体どうするんですか、助主が来たらば——その事態をヨハネ伝15章が語っている。

「我は葡萄の樹、汝らは枝なり」

という。枝は幹に連なっており、そして、樹液が根幹からずっと枝葉の末にいたるまで流れている。人体における血や神経のごとし。このヨハネ伝15章で、

「私は本当の葡萄の樹だ」

と。なぜ、「本当の」と言われたか。「アレーティノス」という字が使っている。なぜ本当のか。葡萄の樹の方が本当ですよ。キリストは葡萄の樹ではないですよ、普通の常識なら、けれども、

「私はまことの葡萄の樹で、そこらに生えている葡萄は本ものではない」

と——そうは仰らないけれども——なぜ、「本当の葡萄の樹」と言われたか。

ゲーテの『ファウスト』の終りの方に、

「すべて過ぎ行くものは映像にすぎない」

という。

「パンタ・レイ」(すべてのものは流転する)

というギリシア人の哲学者の言葉と同じようなぐあい。また、方丈記の第一章みたいに、すべてのものは移りゆく。伝道の書の第一章のところに、

「空の空なるかな。すべて空なり。日の下に新しきことなし」

という。「日の下に新しきことなし」なんだけれども、実は日の下に一つ新しきことが起きた。神を本当に顕した一人の人物が現れてきた。天界から地界に臨んできた。これは絶対に新しいことです。イエス・キリストという事実は絶対に新しいことで、これは他にたぐいがない。質がちがう。

即ち、すべて移りゆく現象体は影にすぎない。プラトンもそのような角度から哲学を言っております。「アナムネーシス」の思想です。思い出る、「想起」ということ。ところが、現象体でありながら、本当の現象体が現れてきたから、キリストは

「我はまことの葡萄の樹」

と言われた。

「そこらの葡萄の樹はまた枯れるかもしれないけれども、私は本当の葡萄の樹だ」と、私はそのようにこの言葉をつかみたいのであります。即ち、キリスト自身は現象でありながら、彼は根源現象である。滅びない現象である。

「この私が本当の葡萄の樹で、私を育てているものが天界のお父さんなんだ。お前たちはその枝だよ」

と。だから、キリストは、

「私に居なさい。私に連なっていないなさい」

と言われる。「居れ、居れ」という字がたくさん書いてあるでしょ。あれはみな「メノー」「宿



る」という字です。宿らなければダメなんです、思ったりなんかしているうちは。皆さん、空気を思っ生きてますか。空気は皆さんの肺の中に宿るではないですか。入ってくるではないですか。入ってこなければ本ものではない。太陽の光は、思ったつてダメです。やっぱり、全身に浴びなくてはダメです。皮膚の中まで浸透してこなくては。

●実力の裏付け

信仰とは決して、心理的に思ったりしている世界ではありません。全身をもってキリストに托身し、キリストを体受し、身体で受けとるということなんです。それはどういこうとかというと、十字架によって切り開いたこの道に楽に入れる。この魂は、私は十字架によって開けられたから。

「私は戸の外で叩くよ。開けば、私は入っていつて、一緒に御馳走を食べようね」

と、復活のキリストは黙示録のところでヨハネにそう言っておられる。

「私は一緒にご飯を食べる」

と。キリストは御馳走が好きだものだから、よく御馳走のことが出てきますが。そういうように、「一緒に入って食べるよ」と。即ち、私の戸はなかなか自分では開かなかつたが、実はもう開けるようにちゃんとできていた。気がつけば。

「あつ、もうキリストが、サビついた私のドアをちゃんとなめらかにしてくださいました」

とね、十字架で。だから、楽に開くです、気がついたら、十字架を仰げば。だから、いついかなるときも楽なんです。本当に自分が贖われた。

「汝は既に贖われてあるから、いよいよ進んでいきなさい」

と。ちゃんともう、実力の裏付けでもつて行くんですよ。だから、皆さん、キリストが「何々せよ、すべからず」なんて仰つたつて、決してこわがることはない。

「大丈夫、私がさせてやるよ。できるよ」

という、その響きが後から必ず響いてこなければダメです。それでなかったならば、それは律法の世界です。福音とは、キリストが命令することは必ず実力の裏付けをもつて命令しておられる。できるんです。だから、私たちに遠慮なく不可能を言う。誰か福音書のキリストの言葉を額面通りに受けて、できますかね。みんな落第ですよ。ちつとも水を割らないで、キリストは言われる。そんなモーセの十誡よりもおそろしいようなキリストの言葉ができるかと、正直。けれども、実はそれができます。また、それをしなければ、本当の生命がこない。いや、本当の生命がくるから、それができる。来ているから。だから、楽しいんです。それでなければ福音ではありませんということが自分で言えるようになる。相変わらず私たちはダメですよ。躓いたり転んだりしますよ。けれども、そんなことはも



はや問題にしないでいい。もちろん、躓いたときには、

「神さま、躓きました」

と、もう隠すことなしに神の前に平伏だけです。けれども、いつも、躓いても転んでも、後退はしない。しぶしぶくすぶつてはいない。先へ先へと進ませられる。クリスチャンがなぜくすぶっているか。こんなにキリストが素晴らしい、喜びの音信をくださったのに。だから、パウロがそう言っているではないですか。獄中の書簡ピリピ書においても、

「喜べ、喜べ」

と。パウロはうれしくてしょうがない。キリストがうちに在って燃えて生きているから。なんと、素晴らしいパウロか。パウロが素晴らしいのではない。パウロの中に在りたもうところの御霊のキリストが素晴らしいんです。素晴らしいものは天上天下、キリストの他にない。

私はよく、「あの人は素晴らしい」とか何とか聞くけれども、そんなことは承知しない。キリストが素晴らしい。人間、私たちはどうしてもみんな五十歩百歩ですよ。ただ、私たちは物体でないから、その人でなければならぬような天下一品として、キリストは一人びとりをおつくりになる。皆さん一人びとりは天下一品で、決して人を羨むことはない。神さまは一人びとりを全世界とも掛け替えのない——代用品のきかないものを人格体というんですから——どの人も本当に神さまにとつては、愛惜してやまないとこのものであります。

●キリストの腕に腕枕

そのような意味あいには、実質は、事實は、本当にキリストのこの十字架によってすつ飛ばされた自分というものに気がついて、

「我はもはやなかった。もう何を考えようか。考えることはない。もう、私の中に

自由にキリストは来てくださるから」

と。クリスチャンというのは——十字架が教会堂の尖塔に上がってみたい、祭壇の上にかかってみたいするけれども——十字架が本当にこの五体の中に光っていないければ、そこに立っていないでしょうがない。それは本当に十字架を受けることと同時に、この御霊を本当に受けとるという、この三相一貫の事態を信をもつて受けとるまでは、そこがダメです。それは何かというと、祈りであります。深く祈らなければいかん。頭で分かってもダメです。

「祈る」とは

「キリストを受けとる」

ことをいう。魂をあげ渡してキリストを受けとることが祈りであります。キリストは12歳のときから32、33歳で伝道に立ち上がるまでに、一体何をしておられたか。お父さんの手伝いもあり、いろいろなこともしたでしょう。けれども、キリストが造った何か大工の



作品がどこに残っているかと思っても、何も残ってない。でも、キリストがなさったことは、一番人の見えないことをなさった。それは、

「キリストは朝まだき起き出^{いで}て」

とか、また

「人は家に帰って行つたが、キリストは山へ行つた」

とか、ルカ伝に書いてある。即ち、彼は身親しく神の懐に入っていた。山へ入って行つたのではない。「山へ入って行つた」というのは、神の懐に入って行つた。彼は神の懐に自分の身を託して祈つた。

ガリラヤ湖上で舟がひっくり返りそうになっても、舟板の上で眠っている。これは、舟板の上にキリストは眠っているのではない。彼は神の懐の中に眠っているんです。そういったようなわけで、

「人の子は枕するところなし」

というが、至るところを彼は枕とすることができる。皆さん、もし、人の家にいつて眠られないとしたら、それは信仰衰弱である。神経衰弱ではなくて、それは信仰衰弱。私は療養所の人たちに言うんです。

「あなた方、夜休むときには、キリストの腕に腕枕して寝るつもりで寝なさいよ。

必ず安眠できるよ」

と。もうどんな心配も何もかも全部まかせる。

「私は引きうけたよ」

と、キリストは言つてくださる。

「我なり。心安かれ。懼^{おそ}るるなかれ」

とキリストが言われた聖言をなぜ、そつちのけにしているか。「懼るるなかれ」とは、

「懼れなき世界に入れてやるよ」

ということです。福音の世界はみんな、それをキリストの中に抱きこんで、その中から無限の力を与えてくださるところの世界です。

だから、この葡萄の幹に連なつた枝となるから、皆さん一人びとりは花となり実となり、

「その枝は全世界に向かつていく」

なんてイザヤ書のどこかに書いてある。

●キリストという原始核

そういうわけで、この御霊を宿すということはこういうことかというのと、9節に、

「父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ」(ヨハネ 15・9)

と。御霊は愛であります。愛の聖霊であります。キリストが「生命である」と言われたそ



の生命の質ももちろん愛でありまして、キリストは神の根源現象であつたが、この私たちが朽ちゆくような体の中に、

「外なる幕屋は滅びていくけれども、内なる人は日々に新たなり」

とパウロが言つた「内なる人」に、御霊によつて生きているところの、

「血氣の体あり、霊の体あり」

というこの「霊の体」の中に、霊核が既に結んでいるんです、霊の核が。キリストの霊核という原始核が私の中に、あなた方の中に結んでいる。私はマイナス99でも、この霊核というキリストの原始核が——原始核の「げんし」の「し」というのは「始」という字ですよ。キリストという原始核です——生命の原始核が私の中に来ているんだもの。全世界の人が何と言つたつて、私はこれは承知しない。これを否定したら、私はキリストの恩寵を否定していることになる。

これは絶対恩寵なので、誰でもが受けられるものが一番素晴らしいものですよ。皆さん、何が受けられなくても、キリストの御霊だけは受けられます。

「求めよ、さらば与えられん」

と、キリストが「求めよ」と言われて、最も与えようと思つたものは、この御霊であります。

「人、新たに生まれずば、天国に入ることあたわず」

とニコデモに言われた、「新たに生まれる」とはこの御霊によつて新生することであり、みんな、誕生日があつて、自分の誕生日をお祝いするけれども、新たに生まれた第二の誕生日はなかなかお祝いしないようですが。

そういう御霊の生命が、原始核が、キリストの原始核が、私の中に「1」という原始核があるから、「マイナス99」と「1」では普通の数学では「マイナス98」になるけれども、そうじゃない。この「1」はこの「マイナス99」をやがてすつ飛ばしてしまつて、

「栄光より栄光に至りてついにキリストの姿に化するなり」

とパウロが言つてくれたとおり、私の人生の目的はキリストの姿に化することにある。地上では、それは弧であるでしょう。しかしながら、その弧は必ず円現する。円現する弧である。何となれば私の信仰がえらいからではない。わがうちに来たり給ひしキリストの御霊がこれを完成なし給うというわけです。

皆さん一人びとりはそれだけの驚くべき約束をいただいている。「約束の保証」と言っているでしょ。約束の保証なるものはこの御霊であります。

「聖国を来たらせ給え」

と祈るのは、なぜ祈れるか。聖国は御霊において既に来ています。聖国の中核であるところの、御霊のキリストがわがうちに来ている。聖国は既に来ているでしょ。だから、「聖国を来たらせ給え」という祈りが本当の祈りになるんです。そうでなかったら、それは口マンチックな祈りにすぎない。「そのうちに聖国が来てくださり、この混沌たる世界が止ま



つていい」なんて、そんなむしのいい祈りをしたってダメですよ。私たちの中に聖国が来
ていなければ、「聖国を来たらせ給え」という祈りは本当の祈りにならない。

「主の祈り」というのは素晴らしい。ところが、ルターが言ったとおり、一般のキリスト
教界において、

「主の祈り自身が十字架にかかってしまった。どうにもならん」

という。どうか、皆さん、このすべての事態はそういった信の現実ですよ。

「信は即ち現なり」^{うつ}

と申すのはその意味なんです。信仰の世界はそのような現の世界です。

●在りて在らしむる者

出エジプト記3章に、

「我は有りて在る者なり」

と訳してあるでしょ。だけれども、私はあのエホバの言葉を、

「我は有りて在らしむる者なり」

または、

「我は在らしめて在る者なり」

と私は訳すんです。それは、お天道さんを見て、そのことが分かった。お天道さんは地球
上の一切のものを、超越の空間に在ることによって在らしめているではないか。この地球
を驚くべきエネルギーで引っ張っているではないですか。その太陽光線は一切の生命源と
して神秘的な力を持っているではないですか。これは在らしめている在り方です。これは
物理の世界だが、いわんや神さまの御霊は、信ずると信じないとにかかわらず、一切のも
のに向かつてそれが来ている。どんなマルスク主義者で無神論をいくら言ってみたって、

「ああ、駄々をこねているな。あの駄々つ子は仕方がないけれども、まあとにかく

生かしておく」

くらいにしか神さまは思っていないませんよ。それは恩寵でちゃんとある。しかし、いつかは、
気がつかなかったら、どういうことになるかは知りませんよ。

この驚くべきその神の恩寵の下にあり、キリストはもう既に万人を救済する道をつくつ
ておられ、万人を生命の中に入れる生命であり、これこそは本当に飽き足るという真理で
あったもう。これにぶつかって、

「ああ、本当だ!」

と言って、降参するということは、降参することによって本当に喜びの世界に入る。十字架・
復活・聖霊のこの驚くべき恩寵の事態の前に、もう私は居ても立ってもいられない。「信仰」
とか何とか、外側からどうのこうのと考えたり、議論したり、そんな世界ではありません。
皆さん、どうですか。今晚一晩で、そういったような世界の中に本当に入って、



「もう、私はくだらない聖書の研究はやめました。もう直ちに読んで、一句を読めば即ち瞑想し祈りこんで、そいつが化体するまでは動かんぞ」

というような気持で聖書を読んでください。そうして、本当のその世界に突入したならば、キリストが現象体であるように、あなた方自身が、私たち自身が即ちキリストの現象体となる。私たち自身が証し人というのは、在ることによって直ちにそれが証しとなるような人物になる。どんなにそれが、私たちの生まれつきのいろんな人間の欠陥なんかあったって、それはいいですよ。破れ衣の中から本当の光が発するから。

「この光、この燈火は、いかなる嵐も、いかなるこの世の混沌も、いかなる思想も、いかなる迫害も、この燈火を消すわけにいかん。この生命を滅ぼすわけにいかん。

このキリストの生命をいかんせん、このキリストの光をいかんせん」

と、皆さん、本当に内側から告白できなければ、クリスチャンではないですよ。「自分の信仰は」なんて、そんなことを考えている事態ではない。

「このイエスを、この人を視よ」

というところに来なくては。あのヨハネ伝4章のサマリヤの女が驚いてしまつて——そのうちにキリストというのが来るかと思つたら、この人がキリストだというので——もう水汲みなんか忘れてしまつて町へ行つて、

「あの人だ」

と言つて指したという。そのようになる。また、ペテロが使徒行伝4章で跛者にでつくわして、

「我を見よ」

と言つた。ペテロが「我を見よ」と言つたこの「我」は決して傲慢な我ではない。

「わがうちにあるこのキリストを見よ」

ということですよ。そうしたらば、何かくれるかと思つたら、そうじゃない。

「私は何もない。何もないけれども、ナザレのイエス・キリストの名によりて

歩め」

とペテロが言つたときに、それは空言でなかった。即ち、クリスチャンとはそのような、

「御霊のキリストを宿す者にあらざればキリスト者にあらざ」

と、パウロがロマ書8章でハッキリ明言している。

そういう意味において、私たち自身がキリストの根源現象となつていく。私たちの言葉とか業とか、そういうことを言っているんじゃないですよ。存在自身がキリストの根源現象となる。そうしたらば、皆さんが、あるいは編み物をなさつても、あるいは台所で何かなさつても、あるいは学問をしても事業をしても芸術のことにたずさわつても、すべてそこから神さまの栄光が現れるんです。キリストの栄光が現れる。御利益ではない。神の栄光が現れるんです。キリストの栄光が現れる。だから、もう上からずうっと貫いている



んです。

●向処如何

この「向処如何」という私の命題はおもしろい。皆さん、こうやって人間は立っているときにどこを指しているか。天を指している。我々の存在そのものが即ち天を指すようになっていく。わが向処は即ち天である。また、私たちはこの地上とにかくこうやって地球の上に立っている。そしたら今度は、私たちの足はどこを指しているかというと、地の中心を指している。天の中心と、天中とそれから地心を指している。天中地心を指しているのが、この人間の在り方ですよ。ああ、不思議だなあと私は思った。そして、私たちのこの姿が——この地球自身が太陽の回りをグルグル回っている。だから、私たちの天を指しているこの天というやつは、物理的に言えば、お天道をしょっちゅう指しているわけだ。この天界のキリストを指しながら、同時にそのキリストを指しているということは、キリストに引つ張られているというわけですよ。ちょうど磁石が北を指すように。神の右に居たもうところのキリストを、私たちは自然にこうやってまっすぐに立てば、垂直にキリストを、御座の一番頂点を指しているようなわけです。

キリストに引つ張られるというのは、どうして引つ張られるか。これは物理の世界ではなくて、今は霊の世界で言ってます。それは私たちの中に本当に、この御霊が来て、御霊の磁性をおびているからです。御霊の磁性をおびているから、私はどんなに揺れましても、ちゃんとキリストを指すようになっていく。皆さん、本当に御霊が宿ったらば、私たちはどんなに揺れても、キリストを指すようになっていくんですから。その磁性を失わないためには何をしているかというのと、しょっちゅう祈っていることです。祈り心が即ち磁性をして磁性たらしめている不思議なものです。この祈り心が即ち、私たちの御霊の磁性をして磁性たらしめているところのものです。いつも十字架ですっかり贖われているこの事態から、いつも聖霊の事態へ正しく入る。ただ「霊、霊」なんて言っているんじゃない。

そうしたらばもう、この信仰の事態は、皆さん、今晚でハッキリされたと思う。もうご心配はいらん。皆さんは五年十年、聴く必要はない。一晩でもって、この信仰の本城にぐつとお入りになったと私は信じます。もしそうでないならば、やはりまだそれは頭で考えている。どうか、そういうことではありませんから。

もうこれはいくら言葉を費やしても仕方がない。お釈迦さんが言ったとおり、

「八万四千の法門を説いたけれども、私は一つも説かなかった」

と言う。内側から本当に自らそれを聴かなかったならば。だから、キリストは

「聴く耳あるものは聴くべし。見る目ある者は見るべし」

と言われた。仕方がない。いくら弟子たちが直々にこんな素晴らしいキリストにぶつかって、その業を見たり、その言葉に接してもどうにもならなかったのは、彼らの中にある「聴く耳」



がなかったから。いくら、肉の耳で聞いていたって、肉の目で見たって、どうにもならん。だから、

「お前たちは今はダメだよ。私が天界へ行って、今度は入ってくるよ」と言う。

●孤児にしないよ

そして、

「お前たちを孤児みなしごにしないよ」

と言う。私はこの一言を置いておきます。「孤児にしないよ」と。あなた方を、私たち一人ひとりを決してキリストは孤児にしない。私はこのキリストのこの言葉に泣きます。私たちはどんな苦境に入りましても、イエス・キリストは私たちの中に御霊として入って、決して孤児にし給わない。私はたくさん先生の先生方や友人や先輩に捨てられた。けれども、私はこの御霊のキリストに救われて、

「お前を孤児にしない。私が一緒にいるから」

と。この一人の御霊のキリストが私の中に、共にいてくださる。これはもはや何ものとも代えることができない。何と交換しようたつて、これを奪われたら、私は私の一切を奪われ、また神の福音に逆らうものである。皆さん、このキリストが「お前たちを孤児にしない」と仰る。どこを、どういう所を、どんな路をお歩きになっても、

「私は孤児にされていない。あなたが共に歩いてくださる。あなたはわが足の燈火ともびである。わがうちからあなたは光を発してください」

という、こういうクリスチャンであります。そうしたら、そのようなクリスチャンは靈燈万里、その靈の燈火は万里に向かって進んでいく。証しせざるを得ない。キリストを証しせざるを得ない。このキリストを如何せん、というわけです。

「われ福音を宣べ伝えずば、災いなるかな。やむを得ざるなり」

とパウロが言った、この「止むを得ざる」という世界です。止むに止まれないという世界です。「ねばならない」なんていう世界ではない。「あっちか、こっちか」なんて、そんな世界ではない。

「せざるを得ない」

という世界です。この「せざるを得ない」で動く人が本当の動き方。これが本当のキリストの動き方、聖意靈法の動き方です。これは御霊がなければダメです。信仰箇条だとか、やれ何とかとか、そんなことでもって動ける世界ではない。

なんと自由な、このイエス・キリストが入ってきたらば、その光は無色透明の光である。電気の光とは違う。お天道さんの光ともな違う。この霊界の無色透明の光でもって、皆さん、何でも見てごらん。それを本当に認識することができるから。また、それに対して、本当



にこの光は生命力をもっているから、創造していくことができる。この福音の世界は、創造的な人間、本当の認識のできる人に、知情意一切の働きが本当に渾然として働くようなことになる。いかなるこの世の文化的なものも、本当にこれを掌握することができ、これを展開することができる。それが経済であろうと、法律であろうと、事業であろうと、学問であろうと、科学であろうと、何であろうと。だから、私は、福音は根源であると言う。キリストのこの

「我は道なり、真理なり、生命なり」

と言っていることは、全生涯をかけてこれを身に体して、もう神の聖名を讃美して生きることに他はない。皆さんはそのような福音にでつくわして、立ち上がっている方々です。どうか、数は少なくても、絶対にあなた方は孤児にならない。絶対にあなた方は勝つから。

「我は既に勝てり」

というキリストによって勝ってください。終わります。

